

北陸における家族生活環境に関する 研究－金沢における産育文化の伝達と継承－

豊村 洋子

目的： 粘り強く、慎ましやかで、勤勉といわれる北陸人氣質は、日本海に面する沿岸地帯の独特の風土によって育まれたといえる。ところで、現今では急速に変容を遂げつつあるとはいえ、日本人的気質の原形を求めるとすれば、それは、とりもなおさず素朴な北陸人氣質の中に遺されているといえる。

本報は、北陸の代表的な文化都市である金沢に根付く子育て祈願のため奉納された産着の一つをとりあげた。合わせて、産育信仰に関する意識調査を行い、北陸人氣質形成のルーツを探ることを目的とした。

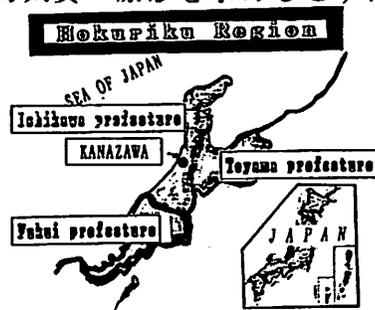


図1 北陸における金沢

1. 《背守り着物》からの考察

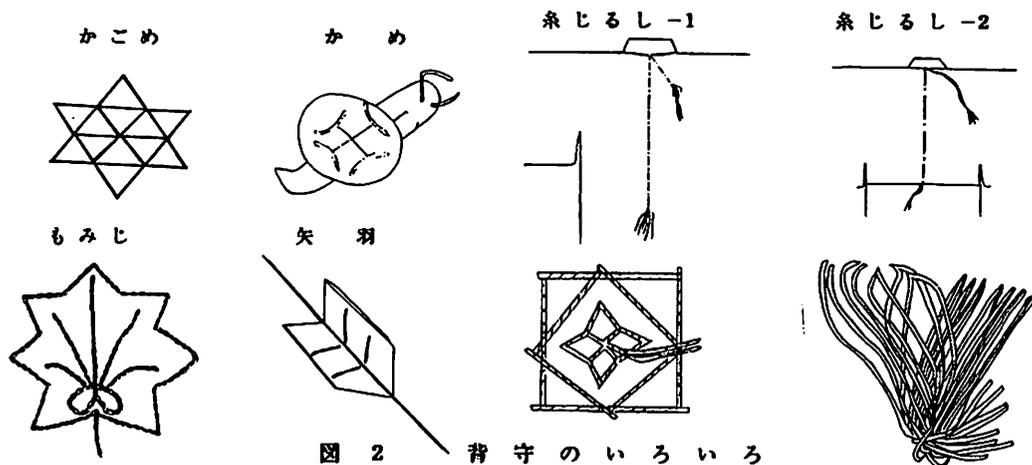
† 奉納物 †： 金沢市の卯辰山山麓寺院群の一つに鬼子母神を祀る真成寺がある。寺内には、江戸時代末(天保10年=1839年の墨書記載の奉納着あり)から、昭和の現代に及ぶ夥だしい産育信仰の資料が保存されている。

遠くインドの辺境にあり、紀元2世紀の半ばの発生といわれる鬼子母神説話の由来については割愛する。我が国においての文献は、奈良時代まで遡って初出がみられ、これが広く定着したのは江戸時代に入ってからである。加賀藩主の代々の生母が鬼子母神祭祀の母体である日蓮宗に帰依していたといわれる。

産育資料として真成寺には、安産のお礼参りや、生児の健やかな成長を祈願して奉納された着物類をはじめ、絵馬や柄杓などが数多く収蔵されている。中でも資料的に特色があるのは着物類である。授け子や安産祈願の成就のお礼、預け子の満期御礼として、また、体の弱い子供が丈夫に育つようにとの願いをこめて奉納されたものである。それらの着物は暫く鬼子母神に着せた後、寺に保管されるようになっている。

現在、400点近い着物類が収蔵されているが、そのうち286点は、昭和57年4月国の重要文化財指定を受けており、時代的にも古いものが揃って入る。その形態上から百徳着物、背守り着物、紋付き着物その他の着物に分けられる。本報告では、主として「背守り着物」について論を進めるつもりである。

†背守り着物†：これらのうちの238点は一つ身、つまり背縫い目のない着物である。我が国には、針と糸の結び付き=針目に魔力があるという俗信が一般にあった。機械によってではなく、人の手による一針ごとの、心をこめた縫い目にこそ魔力が宿るといっているのである。一つ身、つまり背縫い目のない着物を着ると背中から魔がさすという俗信もあるが、針目に靈験を付すという共通の信心から発したものであろう。「背守り着物」は、「背守り」の付いた着物であるが、「背守り」とは、一つ身着物の背中の中央上部に糸で縫い飾りを付け、背縫いのようにみだたものである。「背守り」を付けることは、そうした、子供を災難から護ろうとする親心の具現に他ならない。全国的に背守の模様は沢山の種類がみられるが、真成寺にみられる例の幾つかを図2に示す。



「背守り」と同意義をもつものに「背紋」がある。「背紋」は、背中中央に紋を刺繡、染め、または描いたもので、民間における魔除けやその他の災厄から身を守る為のお守りを下げたり、縫い付けたりする習俗と、背中から魔がさすとする俗信の出会いが、「背守り」あるいは「背紋」と云う幼児を護る様式を自然な形で生んだに違いない。

また、背守りを付けていると、子供が火の中や水中に落ちた時、産神が引っ張り上げてくれるということも信じられていた。

ひたすら子供のために求め、種々の俗信をも一心に信じ込み、祈る親の心が、これらの「背守り」に目に見える形として凝集されたに違いない。子産み子育てにまつわる密やかな親の業ともいえる営

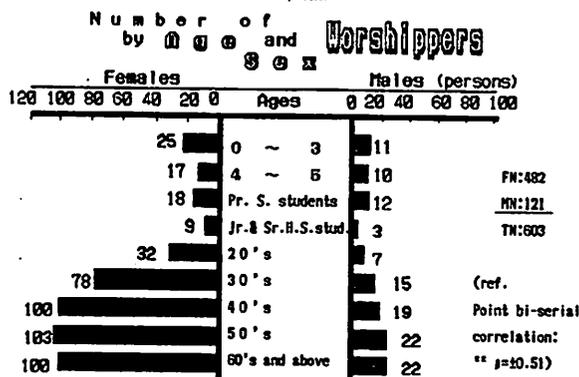


図3 参詣者の性別・年齢層

為は、あらためて人間生活における精神形成に及ぼす人的環境の影響が大きいことを示唆している。

II. 金沢の人々の産育信仰

1. † 産 詣 者 † :

(1) (男女別 / 年代別) 国道沿いのバス停から約15分、縦れ折りのような小径を辿る寺院群のなかに真成寺はある。日常的に参詣者はみえるが、月々の8日は祭礼日となっていて、訪れる人も多い。図3は、その8日全日(1987年2月8日)、午前8時から午後5時までの参詣者数を性別、年代別に表したものである。この間、女性182人、男性121人、計603人であった。全日悉皆調査をしたのはこの日のみであったが、門前で鬼子母神に捧げる花束を用意している店の人との話からも、通常の8日祭礼日参詣者は、この数より±50人前後とみなしている。この日の参詣者のうち、 $\frac{1}{6}$ が児童・生徒で、さらにその60%が学齢前、40%が小・中・高校生であった。また、友人、家族、夫婦という連れ立っての参拝は149組あった。男性は、個人での参詣は少なく妻や家族と一緒にの場合が殆どであり、鬼子母神信仰を支えているのは30年代から60年代の女性達であることがわかる。

(2) (き っ かけ / 誰 から)

上記の調査の前後に3回にわたり聞き取り調査を行った。調査に応じたのは10代から70代までの69人であった。この人達の参詣のきっかけについては図4に示す通りである。殆どが母から娘、祖母から孫への伝承になっている。

この傾向は、後に述べる児童生徒とその親たちを対象にしたアンケートの傾向ともほぼ一致する。

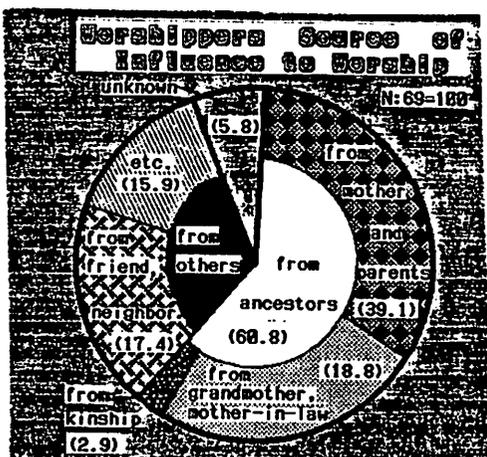


図 4 参詣への契機の人

2. † 児 童 生 徒 † :

真成寺に参詣のため訪れる人々の宗派はさまざまであり、鬼子母神信仰は、まさに宗派を超えて、子育て祈願の対象にされていることがわかる。参詣者の地域も広がっているところから、児童生徒についてはどうか、関心度を調べた。金沢市内を、ほぼ東西南北と中央に分け

Graph Showing the Names Students and Parents know for Shinjyoji Temple (July~September / 1986)

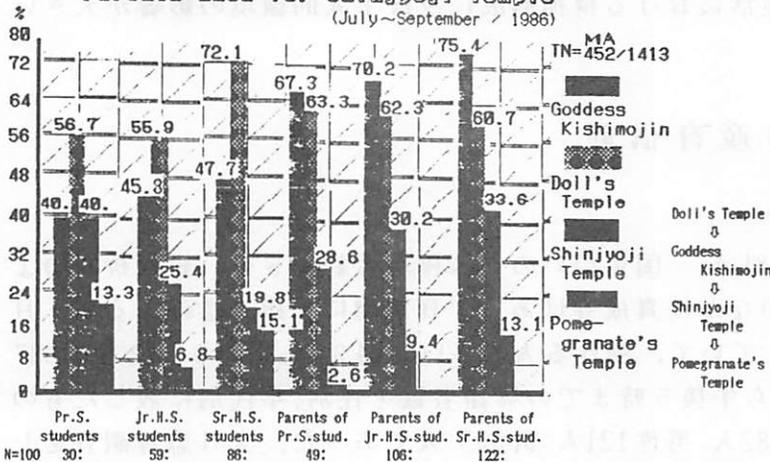


図 5 どのように知っているか

図 5 参照. その伝承経路については, 母からとするものが断然多い. 次いで高率は, マスコミからであり, これは予想外であった. 図 6 参照. 産育信仰には係わりなく育った人々も, 子供もその親も, 大衆的情報機関であるテレビやラジオ, 雑誌類から子育て神・鬼子母神の知識を得ている. 土着の信仰は, 都市化現象で巨大化すればする程忘れられていく命運にあるといえる. ところが, 40万都市といわれる金沢の住民数からいっても, 驚くほどの知名の高さである. 伝統を大切にしたい志向は, 教育委員会や他の公的機関による配慮もあろうと推察される.

How did you hear about Shinjyoji Temple ?

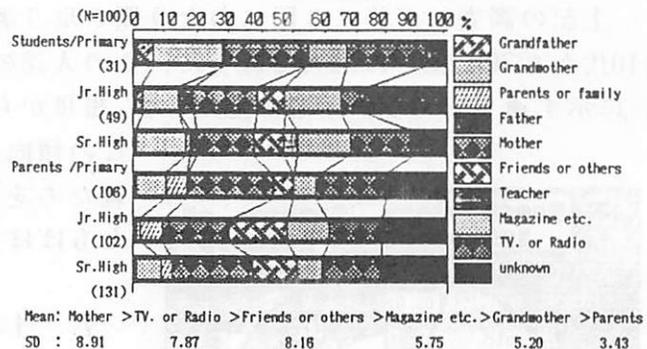


図 4 誰から聞いたか

おわりに

これらの奉納着は, 加賀染織工芸の香りを放つものもあり色を添える. 彩り鮮やかとはいえず, 産育文化は, 陽の文化ではない. しかし, 幕末から150年来の金沢の都市形成の陰(心)の部分を支えてきた.

人々が長い生活の営為におい

て醸成してきた文化の結果がこれらの着物に顕れているのである. この労作を通じて家族の絆の深淵を覗く思いであった. 環境が教育するといわれる. これらの着物に託した「子育ての心」は, このような環境を共有しつつ育った北陸人の今日気質が, 粘り強く, 勤勉で, 慎ましやかとの評価を受けるに与ってしよう.

今後は, 真成寺に奉納の全着物について, 材料, 織り, 染め, 縫いの面から時代考証を自分なりにやり, 更に, これらの着物の「背守り」そのものを系統的に調べ, 体系付けることを課題にしている.

小規模ながら小・中・高校生とその親達へアンケートを送り回収した. 対象11校, 児童生徒数843名(回収率100%), その親570名(回収率68.3%)であった.

生徒の44%が鬼子母神寺としての真成寺を知っており, 親はその約倍である.